

第97話<オンドル>の要約と参考資料

第97話<オンドル>の要約

樋の口の墓地に石が二つ並んでいます。一つが、土呂久で死んだ朝鮮人労働者の墓です。土呂久鉱山で亜ヒ焼きに従事した朝鮮人は3人。顔にぶつぶつができ、皮膚が黒くなり、激しく咳をしながら、病に倒れました。「むぞぎいの」と、土呂久では語り継がれてきました。

第97話<オンドル>の参考資料

97-1 オンドル

広辞苑より

オンドル[温突] (朝鮮語) 朝鮮の暖房装置。床下に仕切りを設けて溝を作って火坑とし、これに火気を通じて室内をあたためる

大日本百科事典3

朝鮮・中国東北部におこなわれている暖房設備。オントル、または、炕(かん)ともいう。構造は部屋の壁ぎわに煉瓦や石などを積み重ね、床面から一段高い床を築き、その内部に四筋ほどの断面四角な熱気坑を通し、これを焚口と家の外に煙突を設ける。内部は、土・しっくいなどで塗り固め、床には油紙をはる。燃料はコウリャンや豆の稈(から)、柴木などを用いる。あらかじめ炕を暖めておくため9月末から火を入れ、寒気の増す早朝・夜間など1日数回焚く。炕のうえにアンペラを敷き、就寝や休息する。

97-2 大切坑前の亜ヒ焼き窯

藤高チエミさんの話(1979年3月4日聴取)

反射炉の横つちよに土で造った亜ヒ焼き窯があった。私が焼き窯のだんご作りに出るようになってから、反射炉は焼いていない。反射炉で焼いた人(田中今朝太郎、佐藤高市、高木安太郎=藤高チエミの父=……)が、亜ヒ焼き窯でも焼いた。大切坑から出したよか鉱石を選鉱場へはやらんで、坑口へんで選別して、焼き窯にもってきた。砒鉱の質のいいのは、そのまま焼きよった。岩元の選鉱場で沈殿して、残ったのを送り返してきた。これを団子にして焼きよった。粉だけを水でこねて団子にして置いちよくと、固まるとです。「オンドル」ちゅうて乾かす部屋が窯の横につくってあった。ここで乾かして、窯の中に入れて、下を薪で焚いて、団子を上にのせる。1号窯、2号窯、3号窯ちいうて、3つくらい段々につくってあって、その中に入って亜ヒをかきだした。

私たちは団子づくり。鉾石かるうてきちゃあ、団子つくるだけ。いやいややりよった。亜ヒに負けるから。それがいちばん厭。軍が使うちいうてやらせよった。「やれやれ軍のこっちゃけ」とがまんした。鼻にかさができてむくれちまいよった。今も、寒うなったら、傷ができて赤うなる。亜ヒ焼きちゆうな、するもんじゃねえや。「国のためじゃ」ちいうて、毒ガスという話も聞いた。監督ちいうて世話役から。団子作りは水を混ぜる。壁塗る泥のようにして。岩元から運ばれてきたのは濡れちよる。粉をふるうてつくりよった。東岸寺から専門の人が来よらした。シカノばあちゃんとこ親子は、上の亜砒窯にも下の亜砒窯にも来よった。ここでできた粗砒を上製の精製に持って行くのを亜ヒがろいというた。

97-3 オンドル小屋

藤高チェミさんの話（1979年3月4日聴取）

焼き窯の横の小屋（10畳敷きの広さ）にオンドルがつくってあった。反射炉の横の窯にも、事務所の横の窯にも。朝鮮人の人が来てオンドルを始めた。ふつうの家の床下に四角い穴溝を掘って、石垣を通して、上は土をかぶせ、それに煙を通す。焚口は風呂の焚口みたいで、小屋の外についている。溝は縦横にはりめぐらしてある。だんごを地べたに置いて乾かすとですよ。ひと窯くべるほどの団子がこさえてあげてある。2段にしたり、積み込んだら乾かん。オンドルでは1日では乾かん。2, 3日かかった。

川原一之「口伝 亜ヒ焼き谷」P164~166

大切坑で砒鉾の採掘が始まったのは、そんなころのこと。この鉾石をどこで焼くか問題になった。すぐ前の反射炉は、選鉾場から送り返された粉鉾を焼く施設じゃき、大切坑の鉾石をそのまま焼くこたでけん。しばらくの間、3町離れた1番坑の窯まで持って焼いた。やがて反射炉と大切坑の間に、「神地」の下の窯土を運んで粗製窯が1基築かれた。

(略)

大切坑の砒鉾を坑口の前で手選して、新しい粗製窯で焼き始めると、煙害の苦情の絶えなかった反射炉は操業が中止された。選鉾場から送り返した粉鉾も、団鉾にして粗製窯で焼いた。反射炉で働いとった安太郎さんや田中今朝太郎さんが、そのまま窯の焼き方になった。反射炉と粗製窯はまるで構造が違う。じゃが同じ衆が同じように亜砒をつくったんで、部落ん衆はこん粗製窯も「ハンシャロウ」と呼んだ。ハンシャロウは設備の呼び名で、そのあたりの場所の名前ようになった。

粗製窯の横に、5坪くれえの小屋があったがの。小屋ん中は四角い溝を掘りめぐらし、石垣を囲うて上に土をかぶせちよる。小屋の外で焚き口で火を燃して、煙をこの溝に通す。地べたには、粉鉾を水でこねち握った団鉾が並べてあって、2, 3日置いとくと乾燥して固まる。川田時代は窯の上に団鉾を並べて乾かしたが、岩戸鉾山のころな、こげなやり方

に変わった。考えついたのは、徳村、金山、大川といった朝鮮人の焼き方じゃ。朝鮮や満州のオンドルを応用したとみゆる。そんなところ全部で20人くらいの朝鮮人が鉾山で働いちよった。「樋の口」の上の6軒長屋1棟は、朝鮮人ばかり住んどったので「朝鮮長屋」と呼ばれた。ここにも粘土を固めたオンドルがつくってあって、冬の寒さをしのいだようじゃ。

安太郎さんの後添えのテルさんは、学校卒業したチエミさんを連れて団鉾づくりの仕事に出た。オンドル小屋の外で紛鉾に水をませ、壁塗る泥んごつこねて団鉾を握る。じきに亜砒に負けて、鼻の脇に瘡ができてむくれてしまう。若い娘のチエミさんは、いやでいやでたまらんかった。鉾山事務所からちよいちょい監督が見回りにきて、「お国のためじゃ。亜砒負けくらいがまんしろ」というた。なんでも亜砒酸は、軍でつくる毒ガスの原料になるちゅう話じゃ。チエミさんは「やれやれ軍のこっちゃけ」とがまんして団鉾を握った。

97-4 朝鮮人亜ヒ焼き夫

佐藤ハルエさんの話（1978年7月9日聴取）

亜ヒ焼きやっていたのは、徳村、大川、金山さんの3人。精製窯の並びの窯。

97-5 達本成徳さん

土呂久鉾山労働者名簿より

達本成徳 明治33年3月3日生 入社昭和17年7月10日 退社17年9月30日

達本ミホ子 昭和7年9月13日生 入社昭和20年8月26日 退社昭和20年12月

15日

神崎三郎証人調書（1978年9月20日宮崎地裁延岡支部）

153～

被告弁護士（山口定男） 先ほど、（粗製焼きの）親方ということを行いました、その請負作業をやっておった人を親方と言うんですか。

神崎 はい。

被告弁護士 親方の収入はどんなものだったですか。

神崎 先ほどもちょっと言いましたが、亜砒酸の焼き方は非常に難しいわけです。空気を調節して焼くわけですが、当時の親方は天才的な男でしたから、私らよりはるかに収入がありました。

被告弁護士 その人の名前を覚えておられますか。

神崎 徳村だったと思います。

佐藤仲治さんの話（1978年11月19日聴取）

徳村は初め、助さんに連れられて来た。炭焼きに土呂久に来た。「神地」の上の〇〇山で炭焼きをやった。炭焼きの腕はたいしたものだった。亜ヒ焼きが盛んになって、焼く者がおらんようになって、亜ヒ焼きをやり始めた。

佐藤正四さんの話（1979年3月3日聴取）

徳村のとこの窯（精製窯）には上り小屋があって、昼食をとっていた。板でんなんでん真っ白で、字も書けるくらい。亜ヒ酸が積んでいた。風呂場もあった。

佐藤実雄さんの話（1978年7月聴取）

「じょせい」というのが朝鮮の姓。政市さんのあとに、亜ヒ焼きをやった。顔いっぱいブツブツができて、色が黒くなって、咳がひどかった。ゴホンゴホンいうて。

堀江武雄さんの話（1977年8月11日聴取）

徳村さんは、風呂場のすぐ隣に住んでいた。この奥さんが、あとから風呂焚きをした。朝鮮人で、日本の名前をもち、まじめでよく働く人だった。

*昭和初めに休山したころ、風呂焚きのミサさん、3番坑の亜ヒ焼きをしていた政市さんが去ったあと、徳村さんが政市さんのあと、クワさん（本妻）がミサさんのあとを継いだ。最も危険な仕事を朝鮮人がやった、ということ。（KK）

富高暁、ユキキさんの話（1979年11月5日聴取）

東岸寺の東、黒葛原の下、才田で炭焼きをしちよったのを連れてきた。3番坑の粗製を徳村1人で働きよった。徳村は「樋の口」におりる小さい道の左側に小屋建てておった。おとなしい嫁女（クワ）と女の子2人（ミホ、アサエ）。

佐藤福市さんの話（1978年8月6日聴取）

徳村は「達本成徳」という名で通っていた。徳村は日本で付けた名前。本妻（クワ）のおられるところは焼き窯に出よった。亜砒の精製をすることはハルさんといっしょになった。おクワさんは、子どもといっとき延岡におって、朝鮮に帰っていった。ハルさんと徳村さんは昭和28年ごろ土呂久を出て、徳村は延岡で死んだ。ハルさんには子どもがおったが、岐阜県に朝鮮の村がある。そっちで、子どもたちは太った。昭和43年に乗用車2台で家内中来たことがある。昼男は子どもを連れてきた。ヒロ子、マサエも来た。夜男は来なかった。墓に参った。長石でできた子（「ナカオ」という）が2つか3つのとき死んで、樋の口の上の墓にかかるとる。

徳村は亜ヒ焼きのあと、他の鉱山に出た。山師関係の仕事をやった。なにせ、力が強かった。大きい体で。アンチン山で（助さんがやらせた）炭焼きをするとき、「ここ

(長石)を貸してくれ」。ここからアンチン山に炭焼きに通って、この上でヤボ作をして、終戦後は、トモロコシなんか作って闇商売をするわけたい。ヤボにタバコ植えたり、7年くらいここにおった。

ハルさんは今、岐阜で仕立屋をしよるごとある。端切れをここ(長石)やら樋の口(助さんの世話になった)に送ってきよった。徳村もハルさんもえらいな咳をしよった。徳村の咳は長石に聞こえるくらい、いつまでも咳しよった。顔は亜砒焼くころ負けていたが、だいぶたって、自然に皮膚の色は薄くなる。

佐藤福市さんの話(1980年3月21日聴取)

徳村さんたちは昭和27年ごろ土呂久を出られたとやから、ナカオが死んだのは26年ごろやなかったかの。4つか5つくらい。変わった病気じゃったが、なんじゃったかの。樋の口の上にかちよる。夜男とナカオは長石の上で生まれた。小さいときから背負ったり、連れちいってヤボ作をしよった。一郎は勝美とあい年、昭和12年生。夜男さんは学校1年に出るからと言って、延岡に下った。昼男は1年か2年、岩戸小に出た。

97-6 金山さん

佐藤ハルエさんの話(1978年7月9日聴取)

金山は、徳村の後妻(ハル)の婿さんじゃった。

佐藤ハツネさんの話(1978年11月19日聴取)

金山さんはおクワさんの弟だった。おクワさんは戦後、北朝鮮に帰っていった。おクワさんと徳村さんの長女(アサ子さん)は頭がよくて、諸塚で学校の先生をしていた。クワさんは頭のよさそうな人。ハルさんは美人。徳村さんもかっこいい人じゃから、儲けたんじゃろな。戦後も闇の商売をして、塩をどこからか仕入れてきて、そんなことで儲けた。

佐藤仲治さんの話(1978年聴取)

金山は鉾山で死んだ。声がでらん。喉ははれものができて悪かった。牛の喉はカンネカズラで突けばようなるというんで、徳村がカンネカズラをたたきしよって、金山の喉を突いた。金山の家内のハルさんは、本妻を捨てた徳村と一緒にになった。徳村と金山は親せきになるらしい。

97-7 大川さん

立宿、田中勝さんの話（1976年6月18日聴取）

いつごろからか憶えんですが、見立から材木を日之影まで出しよった。そのあと、徳村という朝鮮人が垂ヒ焼きをやりよったので、この人を頼って土呂久に来たんじゃないですかね。未亡人の鈴木アサというのと一緒になっていた。賃金が高かったので、家族の多い者には魅力的な仕事だった。いつごろまで焼いたのか、肺を痛めたんでやめたってすな。咳なんかひどい。いつときは鉾山の社宅におったが、すぐそばで焼くわけですから、煙はひどかった。私の叔父の田中今朝太郎も焼いておって社宅住まいじゃった。崔というのが朝鮮名で、崔大川といいよった。崔大川も田中今朝太郎と一緒に反射炉で焼いた。子どもが5人（アサさんとの間に2人、アサさんの連れ子が3人）を養っていくのに骨折った。おアサさんが死んでから、大川さんは何年も生きておられんやった。昭和24年か25年に死んだ。

矢津田サツキさんの話（1977年12月聴取）

大川さんが移ってきたのは、戦争より前、2人とも（大川、妻のおワサさん）病人で、ご飯どま思いうように食うことなかった。ゴホゴホいわすもんやから、「肺病」ち部落の人が集まって小屋を建てた。奥さん（大川アサ）も悪うしてから。おアサさんも、ここで生まれた人。鉾山におらしたが、垂ヒ焼きが中止になって帰ってこらした。奥さんが先に死なした。大川さんも死んで、2人とも尾羽根に埋めたが、石はないです。子どもは3つ4つおるけど、おアサさんの弟が若松に連れて行った。

興梶ミエノさんの話（1977年12月聴取）

昭和13年には、ここにおらした。ここから土呂久鉾山に仕事に行きよった。働けんごとなって、子どもと一緒にあっては悪いというんで、大川さんだけ下の家に移して、奥さん（アサさん）と子どもは上の家。それからどんくらい生きておらしたか。大川さんが死なしたときは、昭和14、15年ごろ、次男は6年生卒業して若松へ。大川さんは50代だったでしょうかね。

97-8 朝鮮人労働者

米田嵩さんの話（1978年1月29日聴取）

堰堤工事のとき、朝鮮人がだいぶ来ていた。工事が終わってから、散りじりになった。うちへんの下の川端に炭窯を造って、上から木を降ろして炭焼きをした人もいる。夫婦者ですが、のちに土呂久に入って、垂ヒ焼きを始めたらしいですがね。

堰堤記念碑

工事着工 昭和8年2月7日

工事終了 昭和8年8月31日

工事費 金 貳万貳千円

佐藤正四さんの話（1979年4月21日聴取）

朝鮮人は亜ヒ焼きに4, 5人と屈曲（鉦山の上）での荷運びに10人ばかり。合わせて15, 16人くらいおった。

竹松は停車場と屈曲で仕事をしていた。資材（坑木など）を屈曲から朝鮮人にかつがせて、山を回って40～50m運ばせて、そこから急こう配を70～80m下へ落とした。

興柁ミエノさんの話（1977年12月聴取）

大川さんが死なしたときは、昭和14, 15年ごろ。大川さんは50代だったでしょうかね。アサさんは明治33年生のサツキさんより若かった。立宿の田中さんが、アサさんの母の元屋で詳しいかも。

立宿、田中勝さんの話（1976年6月18日聴取）

ほかの朝鮮の人は明かりの石をかついだり、大きな機械類を運んだり、肩にかけて山に登った。重労働は朝鮮人。わたちは足元にも及ばん。朝鮮人はずいぶんおった。坑内には入らんで、明かりばかりの重労働。賃金も高い。だいたいの親方が徳村だった。

佐藤カジさんの話（聴取日不明）

朝鮮人は操さんとこの上下の長屋におったけね。前が10軒長屋と8軒長屋、上に5～6世帯ずつおらざったかね。長屋が2つ、馬屋の上下の長屋が2つ。だいな人がおったですわ。

佐藤仲治さんの話（1978年聴取）

金山がきたのは昭和11年か12年ごろ。操んとこの上の長屋におった。徳村は鉦山よりか上におった。惣見通洞の川べりの長屋。大川は岩戸の上村から通いよった。日本人を家内にした。亜ヒ焼きは旧窯で焼いたり。内地人な喜んでいかんじゃった。朝鮮人は10人くらい坑外の仕事。日本名を平山たつごろうという男は、押方から嫁をとって、採鉦に出ていた。長屋に住んでいた。樋の口の上に、5軒長屋がひとつ、6軒長屋が3つ、樋の口に向かって左に10軒長屋と5軒長屋。朝鮮人長屋は樋の口の上の6軒長屋のひとつだった。

佐藤福市さんの話（1980年3月21日聴取）

ナカオが死んだのは昭和26年ごろやなかったかの。4つか5つくらい。病気は変わった病気じゃったが、なんじゃったかの。樋の口の上にかっちよる。

佐藤ツルエさんの話（1980年3月19日聴取）

徳村さんは鉾山がしまえてから、官山の払いさげ山の木馬ひきをしよった。うちから持って行って、トーキビを食べさせよった。そして、ナカオちゅう子が死んだ。誕生すぎたころ死んだ。うちへんから味噌漬けやら持って行って葬式さしたもんな。そして、うちの墓にいけらした。ハルさんが泣かすのじゃ。「ナカオが、地の中に1人はいっていく」。むぞぎの。

佐藤操さんの話（1978年7月19日聴取）

樋の口の墓に埋まっちよるのは①徳村さんとハルさんの子、②金山。樋の口の背戸の長屋で死んだ、この2人。徳村とハルさんの子が死んだとき、ばやん（操の祖母）が来て、「ハルやんが来て、『子が死んだ、子が死んだ』』と言う。